

研究だより

青森市沖館 林業試験場青森支場

編集発行人 木村武松

年頭にあたって

支場長 西村太郎

舊年十月に行はれたM.T.P(管理者訓練計画)の會議で、管理の諸機能として、計畫、組織指令、協調、統制の五段階があることを教へられた。目的に叶つた計畫を綿密に樹て、それに適應した組織を考へ、組織圖を作成して明確な職務の割當と命令の徹底を圖り、仕事の遂行上必要な互ひの協調が円滑に行く様に指導して、最後に仕事の締めくまりが完全に出来る様に、絶へず仕事の経過を調べて調節を圖る。之が管理の要諦と云う譯である。

支場と云う組織は林業試験と云う目的を遂行する爲に作られた組織であるが、その機能を満度に發揮する爲には、試験内容の検討と云う計畫に應じた組織の内容の変更が當然之に伴い、研究者の適否、研究態度を通じて統制の良否となつてその成果が示される。この間に、研究者個々の仕事に就いても、上の計畫以下の五階程が如何に驅使されるかによつて、個々の業績も評價されること勿論と考へる。訓練會議ではこの管理の諸機能の外新しい管理者の考へ方、組織の原則、時間管理の必要性、新人の育て方、教へ方、職場會議の方法作業改善の進め方、従業關係の在り方、効果的に人を使う方法、職場士氣等々多くの管理者の心得を習つたのであるが、自然科学に原理法則がある如く、人文科學に於ても、原理法則を求めて、その基礎の上に立つて意識的管理を行い、從來の成行き管理の非科學性を打破して、効果的な仕事の遂行を圖ろうと云う合理主義に發したものであつて極めて感銘深い講習であつた。講習の意義はその實踐が如何に行はれるかにあること勿論で、受講者の一人として、絶へずその實踐を心掛けたいと期して居る次第である。

一月下旬に開催が豫定されている業務報告會は此の意味で極めて重要視すべきものと考へる。それは現在までの研究業績に對する協調(Coordi-

nating)と統制(Controlling)の検討を行う機會であると同時に、新しく踏み出す計畫の第一歩を決める機會でもある。私は就任挨拶の言葉で、試験場の役割は科學と技術の媒介体であるとし、林業第一線と密接な關聯を持つ爲には、研究題目の撰擇と、研究結果の普及徹底に一層の努力を要請したのであるが、新年を迎へるに當つて、その具現を本年の私の課題ともし、業務報告會に於て、その計畫に、推進方法に、各位の御意見を承つて万全を期し度いと考へる次第である。

「研究だより」も各位の御支援によつて、着實な歩みを以て、愈々第三年を迎へたのであるが、過去一年の歩みを振り返つて見て、調査研究の報告、解説、論說、隨筆、視察談25篇、研究、文獻の紹介、抄録9篇と云う構成と、執筆者19名の中3割に該當する6名の局署の方々の御支援を得たことは誠に意義深いものと感銘する次第で、宮城縣の伊藤氏から三回に亘つて質疑應答を得たことと共に厚く御禮申し上げる所である。吉田内眞部署長の「あて林業視察談」局の山谷孝一氏の土壤調査に基く樹種更改の指針、分場の沖永氏の苗木鑑別上の御意見等々、誠に「研究だより」に相應しい記事として私自身大いに啓發された處であり、K子嬢のボルドー液の話、神氏の隨筆等この種の讀物の満載を期待して止まない。

支場も營林局の格別の好意により新築の廳舎を得て、新年と共に新しい氣分で、落ついて氣持よく研究に専念出来る機會を得たことは、誠に御同慶の限りであつて、能率の良い研究の設計と遂行を心掛けて戴き度いと切望して年頭の御挨拶とする次第である。

★ 御 挨 拶

當支場新廳舎へ

青森營林局に併置された林試當青森支場は發足(昭和22年春)以來營林局廳舎の一部を御借りしているのであるが、此度今迄居た處がとりこわされ、そのあとに瀟洒たる二階建が出来上つた。この階上は局の標本館となり、階下は當支場が借受けることとなつた。此機會に營林局の替らざる御好意に厚く御禮を申上げる次第であります。狭さを聊つていたが之で大部息がつけることとなつた。これからは皆さんに来て頂いても余り窮屈な思いは御かけしないですむかと思はれるから、精々御利用あらんことを御願ひ申し上げます。

青森營林局管内に於ける

ヒバ人工造林地の現況

交 場 白 石 明

ヒバ天然林は目下擇伐作業がとられて居り、更新は主として天然更新が期待されて居りますが、ヒバ稚樹の發生成育は地形、土壌其他環境に支配されて部分的に密生する所や全然發生しない所があるのは當然のことです。ヒバの成林を確實にするためには相當の補植を必要とすることは云う迄ありません。また戦時戦後を通じて皆伐的に亂伐された跡地に就ていろいろと造林上の対策が考えられると思いますがヒバの積極的植栽を実施することも一方法かと思ひます。ヒバは御承知の通り耐陰性が大でありますまた立地に就ても適應性が大きいと思はれますので不良廣葉樹林分の樹種改良の手段として、廣葉樹の利用を圖り乍ら、また同時にヒバの優位な更新面も作ることが出来るのでありますからこのような林分に對する有用な樹種の一つとして推賞されるものと思ひます。ヒバの耐陰性に就ては大正年代には相當に過大視されたようではありますが、筆者の一例

(白石明、「鬱閉度とヒバ稚樹の成長」研究だより NO.10, 昭和26年)を見ましても今後尙検討される事項が多々あるものと思ひます。これはヒバの造林的性質の一例ではありますが、他の性質例へば成長を明らかにするために、ヒバの人工造林に就て研究することもまだ極めて緊要な事であると思ひます。ヒバの成長がおそいことは一大欠点でありまして、此の爲にヒバ林地帯を杉にかえようとして、いろいろと杉の適地調査が行はれて居るとは誠に意義深いものと存じます。然しながら杉は御承知の通り立地に就て好き嫌いが大きいものでありますから現在の亂伐跡地とか不良廣葉樹林分等において杉に適しない山腹以上の地帯に付いてヒバの人工造林を考える方が穩當な様に思ひます。ヒバの成長がおそいのは特に幼令時代で此の期間を短縮する爲には挿木造林を特に考慮する必要がありますと思ひます。能登半島ではヒバの人工造林法に就て特にすぐれた技術をもつて居ります。

またクサアテ、マアテ、カナアテ等にヒバの品種を分け、夫々の性質を明かにして居ります。従つて之等の品種を當局管内の更新につき考えることは、ヒバ人工造林の安全と成長促進を期待出来る問題と思ひますので有意義と思ひます。之まで當局管内殊に青森縣に於て行はれたヒバ人工造林は主に更新跡地又は擇伐跡地の疎開し過ぎたところ局部的に見てヒバ稚樹の生えてないところ、及び空地等に補植程度に植栽されたか、又は地床面にヒバ稚樹が殆ど見れないで濕性植物の繁茂する所謂濕性林地の上に立つてヒバ林の更新の爲に挿木又は植栽を実施したものであります。更に不良廣葉樹林分の樹種改良として、廣葉樹林下に下木植栽を実施した場所もあります。ヒバ林地帯にある雜木林を皆伐した後にヒバを植栽しようとしたのは大正10年からであつて、それは既往造林地の成績が良好な爲であつたと思ひます。即ちヒバの苗木を苗畑で充分に陽光に馴れさせまた一方地被物の状況や保育及び地拵えの方法を注意すると活着は不安でなく、造林木の成長もまた良好であつたようであります。従つてスギに適しない林分は主としてヒバを植栽しようとした事實がありました(大畑事業區第二次檢定施業案説明書参照)

本年度當局管内の各營林署を煩はして既往實施したヒバ人工造林地につき御報告を戴いたのでありますが、之に基いて以下現況の概要を御報告致したいと思ひます。

一. 現況の分類

ヒバ人工造林地は青森縣下各營林署管内、岩手縣下は大槌、雫石、花巻、川尻、水澤、盛岡大船渡、一關、遠野、氣仙沼の各營林署管内、宮城縣下は古川、仙台、中新田、白石各營林署管内に及んで居ります。植栽地の海拔高は青森縣下では凡そ50~750m、岩手縣下では180~1000m、宮城縣下では450~850mに亘つて居ります。植栽地の傾斜度合は平坦、緩斜、急斜等種々ありますし、方位も同じく一定せず東、西、南、北の各方向に及んでいます。林令は大正、昭和の年代に植栽した幼令なものが多く、現在林令50年以上に達して居るもので現況がヒバ純林の林相をして居るものは大畑の3ヶ所、今別の3ヶ所、蟹田營林署管内所在の3ヶ所であります。特に盛岡營林署管内所在の推定110年の人工造林地は學術上貴重なものと思はれます。此の造林地に就ては既に調査を終えたので他の機会に御報告致し度いと思ひます。(未完)

研究だより

寒 茸

支 場 ジンキヨシ

本年7月林業試験場の今關さんと土岐さんとが「寒中の新食菌カンタケについて」と題して研究報告第53號に發表されておりますが、寒中の茸は一般には珍らしく且つ利用価値もあると思われまゝすので次に紹介致します。

「福島縣南の會津地方に寒茸と呼ばれるブナの木に生える食用菌がある。その名が示すように冬の茸である。名産ナメコほど豊富に出るものでなく、特殊な人を除いては土地の人でもその名を知らない。昭和17年11月の初旬、今關は會津田島から若松への汽車の中で珍しい茸を持つていた人を見かけた。その人はブナ山に夏から秋にかけて小屋掛けをし、會津名産の椀木をつくっている人であつたが、雪が降りはじめたので小屋をたたんで下りて来たところであつた。茸は家の土産に採つてきたのである。カンタケの名はその時始めて知つた。茸はまだ若いもので、色は青味をおびた鼠色、形はシメジを思わせ、いかにも氣品に富んだ、うまさうな茸であつた。その後、新潟方面に雪の下から生えるヒラタケがあるとの話を聞き、會津のカンタケこそ、その正体ではないか、そしてヒラタケとカンタケとの比較、真冬の茸栽培などの問題に強い關心をいただいた」。私は今關さんのいうカンタケは昭和の初め頃から知つていた。下北半島の大畑、川内地方でいうドンゴロのことである。極くワカエ（ヒラタケ）に似た茸であるが若いものは今關さんのいう如く青味をおびた鼠色で大きくなるとワカエと區別がしがたい。ただ發生時期はワカエの方は東北地方では6月下旬から10月下旬までであるのにドンゴロの方は11月初旬から4月初旬までである。藤島さん（高知大學教授）が青森營林局の經營部長をしておられた際、私はドンゴロの寫眞を四つ切りに伸ばしてセビヤ調にし、それに着色してお目にかけたことがあつた。すると藤島さんは「これは青すぎる」と言われた。この寫眞は大畑實驗林附近で撮つたもので、風倒したイタヤの太木に一面に生えていたものだつたが、相當大きい茸でも未だ青味をおびていた。私は實物に忠實なつもりで着色したのだが、一般のドンゴロからみれば確かに青味が濃いようであつた。カンタケの青味は早く失せて黄褐色又は鼠色となる。それが寒風にさらされ乍らやや乾燥すると全然色が失せて眞白い茸になるよ

うである。3月の終り頃、スキーをはいて、ころびころびして採るカンタケらしいものは大抵白い。カンタケとヒラタケとは別種のものであることは、この度、明らかにされたが、私は今までろくに調べもせずに、カンタケこそは *Pleurotus ostreatus*（ヒラタケの學名）ではないかと思つていた。それは川村さんの日本菌類圖説のヒラタケの圖を見て、これはヒラタケよりもカンタケの形態であると思つていたからである。それに甚だ非科學的な話だが、*ostreatus*, oyster mushroom, austern-seitling, pleurote en coquille 等の貝のカキを表わすこの茸のラテン英獨佛名はたぶん味からきたものであろうけれども、味の点ではヒラタケよりもカンタケの方が上等でカキの味にも近いような氣がするからである。カンタケはヒラタケよりも肉がやや厚く、少しくしまりがある、殊に莖の部分は菌の弱い私には菌ごたいがあり過ぎる。味噌汁では私はむしろムキタケの方が好きだが肉鍋かスキ焼の中へ入れて食べると實にうまい。利用の点から言つてもカンタケは矢張り冬の茸のようである。一昨年の秋、著者の1人の土岐さんからカンタケの鋸屑菌系塊を送つてもらい10月22日浅虫温泉近くの平内試験地でブナの椀木17本ミズナラ12本にシイタケと同様に接種した。ブナは直徑24センチ、ナラは18センチ位で長さは約1メートルである。この他ガラスビンの鋸屑にも接種した。ビンの方は今年の春早くも茸が叢生したが椀木の方は10月末になつても茸は少しも出る様子が見えなかつた。ところが11月14日、既に野山は白くなつてゐる時、試験地を訪ずれると、青黒いカンタケが椀木一面に生えていた。小さい茸ばかりだつたが10キロ（約3貫）位はあつた。カンタケはブナ、イタヤ等に主に發生するものであるが、ブナが足りないのでミズナラを用いたらブナ同様に發生した、イヌシデ、エゴノキにも發生するそうである。それから12月12日、舊正ならば山の神の日に行つてみると雪は40センチも積つていたがスコップと手で雪を拂ひのけてみると大は10センチ位から豆粒位の茸が3キロ半（約1貫）ばかり生えていた。雪の中は光線不足のためか、いくら小さくても青黒いものはなくみんな黄褐色になつていた。

尚カンタケ栽培についておききたい方は東京都目黒区下目黒、林業試験場、保護部、菌類研究室にお問い合わせ下さい。（1952年12月誌）

★ 抄 録

スギ苗の霜害防除法の一案

(林試月報1952.11 [四手井綱英氏]より抄)

苗畑に於る霜害防除法には氣象的に接地面の温度低下を防止する方法(例、霜除、煙煙法、土埋法等)と肥料により生理的に耐寒性を増す方法(例、石灰施肥、加里追肥により秋伸を防止し苗木を堅硬にする、等)があるが、筆者は次の様な物理的方法で苗木の耐寒性を秋に早くもたせ、又春晩くまで残す方法を提案している。

原理は簡単でスギは冬期葉が赤變している間は耐寒性が強く殆ど霜害にかゝらないから、早霜に對しては早く斯る状態にしてやれば被害は軽減する譯である。また晩霜に對しては晩くまで葉が赤變した状態に残す工夫をしてやるのである。

スギは秋、根部をいじめると早く葉色をかける、また春、赤變した葉が緑に變り出す以前、即ち開節前に根をいじめてやると綠變するのが或期間おくれる。

秋の根のいじめ方は蒔附床或は床替床で根切をする。春は、再度根切をしてもよいが、早晩床替か山出をするのであるから早期に(少くとも芽の動く前)に掘取つて假植してやる。斯く根の活動を一時抑制すると耐寒性の持続期間が長くなり、早霜及び晩霜の害をうけなくなるのである。

以上の操作の主目的は霜害の軽減にあるが、その他にも大部利点がある。即ち、初秋に行う根切は徒長、秋伸びを防ぎ、再發根をしながら根の分岐をよくして根量を増加する。早春の掘取假植は床面積をへらし、他の霜害防除法例えば霜除や、ヒーターによる保温が容易になる。

此方法を案出した動機は、ある苗畑が晩霜にやられたが、春早く床替したものに被害が甚だ少く、晩い程被害が目立ち、晩く迄蒔附床に残つたものが大部分やられたのを見たからである。

但最寒季に寒害にやられる様な所即ち、赤變してい乍ら寒さでやられる様な寒氣の激烈な處には此方法は適用出来ない。

尙、根切、假植の時季は土地により氣候により一定していないが大抵の處秋の根切は8月下旬～9月上旬、春の假植は3月下旬～4月上旬、雪消直後がよいであろう。但、春の早期假植は水が停滯する處や、過密な假植、又はむれる様な霜覆をした處は雪くされ等の害をうける恐れがあるから注意が肝要である。(K抄)

★ 情 報 欄

青森營林局林業標本館兼林業
試験場青森支場の新築落成

別項記載の通り青森營林局では、かねてから計畫中の林業標本館兼林業試験場青森支場の新築を昨年八月より着工していたが、12月漸く竣工をみたので同月20日落成式が行はれ、試験場関係者としては本場大政場長、菊池人事課長、の外秋田支場長(代理)、釜淵及好摩各分場長、當支場員等の列席があり、また同夜は浅虫に於て當支場主催の移轉祝があり青森營林局長始め各部課長及び前記試験場関係者等の臨席を得て盛會裡に幕を閉じた。

尙、翌21日には當支場員等が大政場長を囲んで試験場運営等に關し座談會を催した。

昭和27年度業務報告會

青森營林局第6回造林技術分擔研究會は、1月22、23の兩日に亘り、開催される事となつたので、當支、分場の本年度業務報告會はその直前の20、21の兩日、次記要領により開催する。

記

第1日

- 1 期 日 昭和28年1月20日(火曜日)
- 2 場 所 青森營林局小會議室
- 3 參會者 林野廳、林業試験場、青森營林局試験関係者
- 4 行事及時間 業務報告會、自午前九時
至午後4時半
(年間業務全般の報告及檢討)
- 5 その他 報告者一名につき割當時間30分
(内檢討時間10分)の豫定

第2日

- 1 期 日 昭和28年1月21日(水曜日)
- 2 場 所 青森營林局大會議室
- 3 參會者 前日の參會者及び營林局署員等
- 4 行事及時間 1, 業務報告會(業務成績の一部報告)自午前9時至午後3時
2, 林業試験檢討會自午後3時至午後4時半
- 5 その他 1, 業務報告會は1名當り割當時間20分(内檢討時間5分)の豫定
2, 林業試験檢討會は豫め各營林署から提示された問題について分類整理の上行う豫定